

誰も懂れないシェイクスピアのヒロインたち

『デズデモーナ』と『ヴィネガー・ガール』

北村紗衣

シェイクスピア劇の女性登場人物はさまざまな芸術作品にインスピレーションを与えており、フェミニズム的な翻案も盛んである。古くはアンナ・ブランウェル・ジェイムソンによる女性キャラクターに着目した批評エッセイ集である *Characteristics of Women: Moral, Poetical, and Historical* (1832) やメアリ・カウデン・クラークがシェイクスピア劇のヒロインの少女時代を想像して描いた小説集である *The Girlhood of Shakespeare's Heroines* (1850-1852) から近年の舞台や映画やイラストまで、女性登場人物を再解釈した翻案は多数存在する。一方でどのキャラクターが取り上げられるかについては偏りがあり、『ハムレット』に登場するオフィーリア、『ロミオとジュリエット』に登場するジュリエット、『マクベス』のマクベス夫人、『テンペスト』のミランダなどは絵画をはじめとして多くの翻案が作られている一方、喜劇のヒロインは比較的翻案が少ない。

シェイクスピア劇のヒロインの中では、人種差別や植民地支配を扱った『オセロー』に登場するデズデモーナや、性差別的な作品として批判されることの多い『じゃじゃ馬ならし』に登場するキャタリーナは、やや扱いにくいヒロインであると言える。デズデモーナとキャタリーナについては大きな共通点が2点ある。まず、いずれも家庭内暴力の被害者として劇中で陰惨な目にあう上、『冬物語』のハーマイオニーなどと異なり、作中で救済されることがない。とりわけキャタリーナの場合はいわゆる「じゃじゃ馬ならし」の過程が喜劇的に提示され、キャタリーナが夫に対する服従を説くスピーチで物語が終わっているため、21世紀の観客にとっては受け入れがたい作品だと考えられることも多い。デズデモーナやキャタリーナは観客の同情を誘うキャラクターではあるものの、読者の憧れの対象であるとは言えないであろう。さらに2点目の共通点として、『オセロー』も『じゃじゃ馬ならし』も、前者はデズデモーナとエミリアの主従関係、後者はキャタリーナとビアンカの姉妹関係という女性同士の関係を取りあげている。本発表はこうした共通点を有する作品に登場し、ある種の救済を必要とするヒロインたちが2010年代の文学作品ではどう扱われているのかを考える。扱いにくいヒロインである2人をあえてとりあげたトニ・モリスンとロキア・トラオレによる音楽劇『デズデモーナ』と、アン・タイラーによる小説『ヴィネガー・ガール』を題材とし、2作がどのようにシェイクスピア劇を読み直しているのかを検討する。

トニ・モリスン、ロキア・トラオレ『デズデモーナ』(2011)

『デズデモーナ』(2011) はトニ・モリスンが戯曲を執筆し、マリのミュージシャンであるロキア・トラオレが作曲し、ピーター・セラーズ演出で初演された音楽劇である。セラーズは2009年に『オセロー』を演出している。デズデモーナをヒロインとする戯曲は既に Ann-Marie MacDonald, *Goodnight Desdemona (Good Morning Juliet)* (1988) と、Paula Vogel, *Desdemona: A Play about a Handkerchief* (1993) の2本が先行作として存在する。

モリスンの『デズデモーナ』においては、デズデモーナは自らに押しつけられた規範に抵抗し、オセローが語る広い外の世界の冒険に憧れつつ、支配層の家庭に生まれた白人女性としての特権に気付いていない女性として登場する。アメリカの黒人作家として常に人種やジェンダー、階級を多層的にとらえてきたモリスンは、本作においてデズデモーナをアメリカ南部のエリート階級の令嬢のような形で描いている。原作ではデズデモーナの母のメイドで既に亡くなったというバーバリなる女性の名前が言及されているが、モリスンの『デズデモーナ』はこのバーバリのキャラクターをふくらませ、デズデモーナをアフリカ系のメイドに育てられた令嬢として提示した。かつてのアメリカ南部では黒人の乳母が富裕な白人家庭の子どもを育てることがしばしばあり、このキャラクター造形はそうした習慣を背景にしていると考えられる。本作のデズデモーナは最初にあの世で自分に仕えていたエミリアに会い、友達だと思っていたエミリアから実際の自分たちの関係は主人と召使いのそれであったことを告げられ、白人女性間の階級格差に気付く (Scene 8, p. 43)。さらにデズデモーナはバーバリに会うが、バーバリの本名がサランであったことや、サランが奴隷であったことを知る (Scene 9, p. 45)。自らがいかに女性間の格差や人種差別、階級差別に無知であったかを知ったデズデモーナは、この差異の重要性を認めつつ、自分も女性であるという理由ゆえに別種の抑圧を受けていたことをサランに語る (Scene 9, p. 48)。ここでのバーバリに対するデズデモーナの弁明は言い訳がましいが相互理解への第一歩ではある。

『デズデモーナ』は、初演当時にアメリカのポップカルチャーに流布していた、黒人女性に対して「優しく」

振る舞うだけで階級格差や人種間格差に鈍感な白人の女主人像に対抗し、それでは差別が温存されるだけだということを指摘するような描き方をとっている。『デズデモーナ』初演の少し前には映画『ヘルプ〜心がつなぐストーリー〜』(2011) が公開されているが、この映画では白人の女主人と黒人のメイドとの関係が白人観客にとって口当たりのよい形で描かれており、ロクサーヌ・ゲイなどの批評家から強い批判を受けた。『デズデモーナ』は、黒人男性と結婚した後に家庭内暴力の被害者となったデズデモーナの視点で白人の女主人による反省を描き出し、女性同士の連帯の可能性を見出そうとしているところに特色がある。『デズデモーナ』においては、インターセクショナリティへの接続がある種のヒロインの救済となり得る。

アン・タイラー『ヴィネガー・ガール』(2016)

アン・タイラーの『ヴィネガー・ガール』(2016) は現代の作家にシェイクスピアの再解釈を依頼するホガース・シェイクスピアのシリーズ中の1作である。著者のアン・タイラーはボルティモアを舞台とする地方色豊かな作品を得意とする作家であり、もともとシェイクスピアはあまり好きではなかった。『じゃじゃ馬ならし』はとりわけ嫌いな作品だったということで、物語には大きな変更がなされている。ヒロインのケイトは、父親のバティスタ博士と年の離れた妹バニーと一緒にボルティモアで暮らしている。そこでバティスタ博士が、自分の研究室で働く外国籍の研究者ピョートルのビザ問題を解決するため、ケイトに偽装結婚をすすめる。ケイトは嫌がるが押し切られてしまい、なんとなく結婚準備をするうちに、自分のペースを崩さないピョートルの影響を受け、新しい生き方に目覚めていくという展開である。

本作においては現代風のロマンティック・コメディらしい形でケイトが「救済」される。現代の観客にとっては性差別的なものとしか聞こえない最後のスピーチは、所謂「有害な男らしさ」について、男性文化がいかにも不自由なものなのかをケイトがバニーに教えるという形になっている。このスピーチは互いのボーイフレンドをかばいあった結果、ケイトがバニーに対して行う。姉妹が反目しあってばかりの『じゃじゃ馬ならし』に比べると『ヴィネガー・ガール』の姉妹関係は複雑である。ケイトと妹バニーはあまりうまくいっていないものの、終盤でバニーは真面目に姉の偽装結婚を心配し始め (p. 167)、それに対して新しい生き方を見つけたケイトは感謝するものの聞き入れない (p. 171)。2人は姉妹として互いを心配する気持ちはあるものの、合わないところについては妥協ができないという関係になっている。

『ヴィネガー・ガール』の特徴は、『じゃじゃ馬ならし』のキャタリーナを、2010年代半ばから映画やテレビドラマなどでしばしば注目されるようになった「いけすかない」(unlikable)なヒロインに読み替えている点である。『フリーバッグ』(BBC、2016-2019)、『ノクターナル・アニマルズ』(2016)、『女王陛下のお気に入り』(2018)、『ある女流作家の罪と罰』(2018)、『エマ』(2020、ジェーン・オースティンの映画化) など、2010年代後半は第四波フェミニズムの影響を受け、それまでの映像作品ではあまり描かれてこなかったような不愉快で欠点だらけの女性を人間らしいヒロインとして提示するような傾向が目立つようになった。『ヴィネガー・ガール』のケイトはこうしたトレンドに沿った「いけすかない」ヒロインである。

『デズデモーナ』と『ヴィネガー・ガール』は、いずれも女性同士の複雑な関係性や「有害な男らしさ」、インターセクショナリティなど、第四波フェミニズム的な論点を取り入れたシェイクスピア劇の翻案である。また、両作ともポピュラーカルチャー全体のトレンドを強く反映した形の翻案となっている。モリスンやタイラーは作家性の強い作家と見なされているが、一方で映画やドラマなどが形作るポピュラーカルチャー全体のトレンドに影響を受けて改作を行っている。ポピュラーカルチャーがシェイクスピアの読解や翻案、とりわけ女性表象の再解釈に及ぼす影響は大きいと言えるであろう。

参考文献

- Clarke, Mary Cowden, *The Girlhood of Shakespeare's Heroines: In a Series of fifteen Tales*. 1850-1852. Cambridge: Cambridge University Press, 2009.
- Gay, Roxane. *Bad Feminist*. New York: HarperCollins, 2014.
- Jameson, Anna Brownell. *Characteristics of Women, Moral, Poetical, and Historical*. 1832. Cambridge: Cambridge University Press, 2009.
- MacDonald, Ann-Marie. *Goodnight Desdemona (Good Morning Juliet)*. New York: Grove Press, 1998.
- Morrison, Toni, and Rokia Traore. *Desdemona*. London, Oberon Books, 2012.
- Vogel, Paula. *Desdemona: A Play about a Handkerchief*. New York: Dramatists Play Service, 1994.
- Tyler, Anne. *Vinegar Girl*. London: Hogarth, 2016.